

誰に贈る？

明るい陽ざしが降りそそぐ町田第二中学校の美術室には、始業前から多くの生徒たちが集まる。楽しそうに話したり、じゃれ合ったりしていて、実にはぎやかだ。

今回の授業では、教科書（『美術1』）P30-31に掲載されている「飛び出すカード」をつくる。小山先生は生徒たちに、次のように切り出した。

「1年A組になって、数か月が経ちましたね。いちばん初めの授業では、名刺をつくったけど、覚えているかな。まだよく知らない子に『初めまして』と、自己紹介代わりに名刺を渡しました。今回は、親しい人のためにカードをつくります。仲良くなったクラスの子にあげてもいいし、家族や学校の外の人に贈ってもいいですよ」。

続けて、先生は「これは美術館で買ったんだけど……」と言いながら、マッシュー・ラインハートのカードを取り出し、開いて見せた。「みんなには、こういう『飛び出すカード』をつくってもらいます。カードを開くと、ゆっくり花が開きますね。形だけでなく色にも注目。葉が緑で、花が紫色だよ。この色遣いは、前に学習した『補色』の組み合わせです。このカードは、形や色を計算してつくられているんです。では、教科書の30～31ページを開いてください」。

そして、教科書に掲載されている花束のカードを見せながら、「これはなんのカードだろう」と問いかけた。生徒はすかさず「バースデーカード！」と答える。



撮影 鈴木俊介

特集

気持ちを伝える

デザイン

中学校では色や形の性質を理解したうえで、より明確な意図でデザインし、作品として表現することが求められます。本特集では、小山一雄先生の「飛び出すカード」をつくる授業をご紹介します。自分のメッセージや思いを伝えるために、生徒たちはどのようにカードをデザインし、制作していくのでしょうか。



マッシュー・ラインハートの「飛び出すカード」を見せながら話す小山先生。



教科書にはさまざまな作例が紹介されている。

授業レポート

心を込めて「飛び出すカード」をつくらう！

東京都町田市立
町田第二中学校
小山一雄先生 × 1年A組 (生徒数32名)

「そうですね。これはバースデーカードだから花束が飛び出すようになっている。誰にどんな気持ちを伝えたいかで、何が飛び出すかわわってきそうだね。食いしん坊の子にプレゼントするなら、好きな食べ物が飛び出すなんていうのもいいかもしれない。次の時間までに誰にどんなカードを贈るか考えておいてください。今日の授業では、どうやってつくれば飛び出すのかを、試作したいと思います。」

試作してみよう

先生はそう話し、小さい画用紙を2枚配布した。1枚は台紙で、もう1枚は切ったり折ったりする紙だ。



「どう? うまくできている?」。友達と相談しながら試作する。

そして、教科書P 30の右下にある「飛び出すカードの構想を練ろう」を参考にしよう告げ、実際に目の前で紙を切って、実演して見せた。

さらに、「これも参考にしてみよう」と、幼児用の「飛び出す絵本」を各グループに配布。生徒たちからは「わーっ、かわいい」「こんなのつくってみたいな」などの歓声が上がった。

それから、試作がスタート。「飛び出す絵本」を何度も開いたり閉じたりしながら、飛び出し方を確認する子、とりえず紙を切って折りながら考える子、隣の子に相談しながら作業を進める子……それぞれが自分なりの方法で試作していった。そして、授業は終わりの時間に近づく。



「飛び出す絵本」を何度も開いて、飛び出し方を研究。

「では、みなさん、ちょっと手を止めてください。メモしてほしいことがあります。『飛び出すカードづくり 三つのポイント』です。いいですか。①絵の具やペンは使わない。……字や絵をかくてはいけません。すべて紙を切り抜いてつくります。

②色の紙を組み合わせる。……教科書の花束のカードのように、いろいろな色を使ってつくりましょう。③誰に贈るか決める。……いちばん大事なことです。次の時間までに渡す相手を決めましょう。そうしないと形が決まらないからね。次の時間では、カードづくりの本番に入ります。」

次時への期待が高まったところで、終業のチャイムが鳴った。

授業展開 (全4時間) 生徒の活動

第1時 導入

- 「飛び出すカード」や「飛び出す絵本」を見て、作品制作のイメージをもつ。

構想を練る

- 画用紙を使って試作し、構想を練る。

第2・3時 制作

- 紙の特徴を生かし、形や色を工夫しながら、立体的に「飛び出すカード」をつくる。

- 自分が伝えたい思いを考え、受け取る相手はどう感じるか想像しながらデザインをする。

第4時

発表・鑑賞

- 自分が制作した作品の紹介をする。

- 他者の作品を鑑賞し、そのよさを味わう。

指導計画

準備するもの	生徒 教科書, 筆記具, はさみ, カッターナイフ, のり
	教師 作品例 (飛び出すカード, 飛び出す絵本), 試作用の画用紙, 色画用紙 (全10色), デジタルカメラ, モニター

学習目標	●形や色を工夫して、「飛び出すカード」をつくることができる。 ●自分が伝えたい思いや、受け取る相手の気持ちを考え、作品に表現することができる。
------	--

評価規準	●興味をもって、作品制作に取り組もうとしている。(美術への関心・意欲・態度) ●カードを意図的・効果的にデザインしている。(発想や構想の能力) ●紙の特徴を生かして美しく表現している。(創造的な技能) ●立体的な「飛び出すカード」に仕立てている。(創造的な技能) ●色の配色を工夫して表している。(創造的な技能) ●作品の鑑賞会で、さまざまな作品のよさを理解している。(鑑賞の能力)
------	--

第2・3時

心を込めてつくろう

「さあ、今日からいよいよカードづくりの本番です。みんな、誰に贈るか決めましたか?」。先生がそう投げかけると、生徒たちは、「同じ部活の友達」「顧問の先生」などと元気よく答える。

「何も言わなくても、渡しただけで気持ちが伝わるような、そんなカードをつくれたらいいですね。感謝の気持ち、お礼の気持ち……相手へ伝えたい思いを込めてつくりましょう。それでは、色画用紙を準備しましたので、何枚でもいいから選んでつくってみましょう。」

先生は10色の色画用紙をずらりと並べた作業台の前に生徒を集める。「わーっ! この色すてき」「どの色を使おうかな」。色とりどりの紙を前に、生徒たちは一気に盛り上がる。

紙を選んだ生徒たちは、さっそく手を動かし始めた。黙々と作業を進める子、「誰に贈るの? 私はね……」と周りの子と話しながらかくる子、「こうしたらうまくいくよ」と友達に教えながらかくる子など、さまざま。

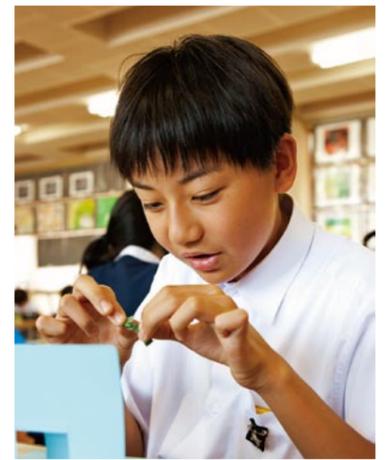
先生はその間、教室内を回り、生徒の質問に答える。でも決して手取り足取り教えるわけではない。「ここを切ったらいいかもね。あとは自分で考えるんだ」「ここに違う色を入れたらきれいかもね」「カードの外側の部分は、もっと工夫できるはずだよ」。生徒への助言は最小限。基本的に自分自身で考えるよう促す。

また、合間に制作過程をデジタルカメラで撮影し、モニターで大きく映し出して見せる。友達の制作の様子を知ることで、生徒の創作意欲を

刺激するためだ。

カードができあがるにつれ、「先生、見て!」と、うれしそうにカードを開いて見せる子や、「かわいいねえ」と友達のカードを手取る子が現れ、教室はどんだんにぎやかになっていく。

「次の時間では、一人ずつ作品を発表してもらいます。誰に贈るのか、どんな思いを込めてつくったのか、みんなに話してくださいね。」



細かいパーツを丁寧にのり付けしていく。



贈る相手を決め、思い思いに作業を進めていく。友達どうして教え合う姿も見られ、教室はにぎやかだ。



特集
気持ちを伝えるデザイン



気持ちを伝えるデザイン

第4時

自分の作品を語ろう

今日は自分がつくったカードを発表する日。授業の冒頭では、ワークシートが配られた。「カードの特徴」「制作時に苦労したこと」「渡す相手」「どんな気持ちを込めたか」など、発表する項目が書かれた「発表原稿」となるシートだ。生徒たちは、真剣に原稿をまとめ始めた。「それでは、いよいよ発表に移ります。みんな、発表のときに気をつ

けることはなんですか」。先生がそう投げかけると、生徒からは「声を大きく」「落ち着いてはっきりと」「内容が伝わるように話す」などの、注意点が挙げられた。

カードを持った生徒を撮影した画像をモニターに映し、その前で発表を行う。一人あたりの持ち時間は1~2分だ。

発表を聞いて初めて、どんなカードをつくったのかわかる生徒も多い。例えばO君(写真左)。カードの内と外には、小さな正方形の紙が貼られている。

「鉄道好きのH君に贈るカードです。」



ピッチャーを目ざすK君。ストレートなメッセージを表現した。

ならきっと気づいてくれるだろう。

いっぽう、ストレートなメッセージをカードに込める子もいる。K君(写真右上)は野球部。「ピッチャーやらせてください」という文字と飛び出すボールを見ると、彼の直球な思いが伝わってきて、思わず笑みがこぼれてしまう。

「今のいちばん強い思いを表したカードです。渡す相手は顧問の先生。自分の気持ちに気づいてほしいから。ボールがどうやったら立体的に見えるか、すごく考えてつくりました」。どの生徒も、照れながら自分のカードを大事そうに手にし、発表をしていく。聞く側の生徒のまなざしも優しく、教室は温かい空気に包まれていった。そして、全員の発表が終わり、先生はこう語りかけた。

「みんな、すばらしい『飛び出すカード』ができましたね。2年生になったらもっと上手につくれるかもしれません。でも、1年生の『今』の気持ちを込めて一生懸命つくった、そのことがとても大事だと思います。上手・下手でなく、気持ちが込められているかどうか、いちばん大事。相手に渡すのは少し照れくさいかもしれないけど、心を込めたカードだから、必ず手渡してくださいね。きっと相手も喜んでくれるでしょう」。

先生の話聞きながら、生徒たちはつくったカードを愛おしそうに眺めていた。



大きく映し出された画像の前で発表する。将来の夢は新宿駅の駅長だと語るO君。カードの外側に、車両の「顔」を配置した。



この一辺2センチの正方形は、歴代のJR京浜東北線と総武線の車両の「顔」です。そこに貼り付ける前照灯と後照灯をカッターで切る作業が細かくて苦労しました」。

そう言われてみると、小さな正方形が電車を正面から見たときの「顔」に見えてくる。また、車両ごとに微妙に表情が異なる。彼の細かいこだわりは、同じ鉄道好きのH君



仲良しのクラスメートとカードを交換。

カードに込める、さまざまな思い

相手が好きなものをつくって贈ろうとする子、相手へのメッセージを表現しようとする子、自分が好きなものをつくってそれを理解してくれる人に贈ろうとする子……生徒がカードへ込める思いはさまざまです。ここでは特に印象的だった3名をご紹介します。

Aさん 相手が好きなものをつくる



学級委員を務め、しっかり者のAさん。お兄さんが好きな「花火」をテーマにすることを早々に決めた。

お兄ちゃんへ 受験勉強がんばってね



手先が器用なAさんは、細かい作業が得意。花火を見上げる人々を小さなパーツで表現していった。



受験を控える3年生のお兄さんへプレゼント。はにかみながら受け取ってくれた。

T君 自分の思いを伝える ためにつくる



家族と仲良しのT君。「お父さんとスカイツリーへ行きたい」という思いを表現することにした。

お父さんへ スカイツリーに連れて行って



先生に相談するT君。雲に隠れたスカイツリーと、展望台から見下ろした隅田川と東京のビル群をつくることに決めた。



「お父さんに『いっしょにスカイツリーへ行こう!』と言って、渡します」。

F君 自分と向き合って つくる



トランポリンの全国大会に出場するF君。テーマはやはりトランポリンで、贈る相手はコーチ。

コーチへ オリンピックを目ざします!



作業が思うように進まない。ふだんはあきらめの早いF君だが、今回は大好きなトランポリンがテーマだけに、粘り強く取り組む。



最終的に五輪を作った。いつか自分が出場するという決意を込めて、コーチへ渡す。



T君 → お姉ちゃんへ
「最近、忙しくて元気がない姉に渡します。これを見て笑顔になってほしい。自分が獅子座で、ライオンが好きなのでつくりました」



Gさん → 親友へ
「友達が好きなアイドルグループ『嵐』をテーマに作りました。これからもよろしくね、と言って渡したいです」



S君 → 転校する友達へ
「モスクワに転校する友達に贈ります。今までありがとう、僕と遊んだことを忘れないでね、という気持ちを込めました」

わたしからあなたへ
今の思いを込めたカード



K君 → 両親へ
「夏らしいカードを作りました。いつもありがとう、と言って親に渡します。喜んでほしくて、がんばって細かい作業をしました」



Sさん → 幼い弟へ
「木を飛び出すようにするのが苦勞しました。動物が好きな小さい弟に渡します。楽しい気持ちになってくれるといいな」

カードの外側にもひと工夫



P7で紹介したAさんの作品。カードの外側もかわいらしくデザインされている。

授業を終えて ——大事なものは「表現しようとする気持ち」

私は「どうやったら飛び出すカードがくれるのか」というテクニックを、子どもたちに細かく教えることはしませんでした。自分自身で考えて、答えを見つけていってほしいからです。結果的に、子どもたちは、友達に相談したり、教科書や「飛び出す絵本」を参考にしたりしながら、自分なりに考えて制作していました。

美術では、作品のできばえに目がいきがちですが、私が授業でいちばん大事にしているのは、「表現しようとする気持ち」です。子どもが自身を見つめ、自分の気持ちを作品にどう表現するか、試行錯誤しながら考えて制作することが重要だと思っています。

今回、発表を聞いて、「そんなことを考えていたんだ」と、驚きや発見があって、とても楽しかったですね。子どもたちも、互いへの理解が深まったんじゃないでしょうか。

自分を表現したいと思うことができ、さらに周りの人たちへの理解を深めることができる——美術の授業がそんな時間になったらいいなと、私はいつも思っています。(談)



小山一雄 こやま・かずお

1953年神奈川県生まれ。和光大学人文学部芸術学科卒業。町田市立町田第二中学校主幹教諭。東京都教職員研修センターが主催する「東京教師道場」で、芸術班(美術)リーダーを務める。第29回東京都中学校美術教育研究大会第7ブロック町田大会 実行委員会事務局局長。版画教育研究会(町田)世話役も務める。

光村図書中学校「美術」の著作者である上野行一先生に、今回の授業を参観していただきました。

授業を参観して



上野行一
うえの・こういち

1952年大阪府生まれ。帝京科学大学教授。大阪教育大学大学院修了。広告デザイナー、公立学校教諭、高知大学教育学部教授を経て2010年より現職。2008年より発足させた「美術による学び研究会」主宰者として、全国で活動の輪を広げている。著書に『まなざしの共有』(監修・淡交社)、『私の中の自由な美術』(光村図書)など。

「デザインは 人ともとの関係を考え、 人と人をつなぐもの」

小山先生が授業された「飛び出すカード」は、学習指導要領のA表現(2)で示されているデザインに表現する活動、およびA表現(3)に関する内容の授業です。

今回の改訂では、表現活動を通して育成する資質や能力が「発想や構想の能力」と「創造的な技能」とに整理されました。A表現の内容は絵や彫刻、デザインや工芸の活動それ自体ではありません。「表現する活動を通して」とあるように、絵や彫刻、デザインや工芸は学習の手段であることを十分理解することが大切です。

そのうえで「(1) 感じ取ったことや考えたことなどを基にした発想や構想」と「(2) 目的や機能を考えて発想や構想」の違いをわきまえて、指導計画を練る必要があります。

授業の導入段階で小山先生が「いちばん感謝している人は誰でしょうか」と問いかけました。さらに「どんな友達がいるでしょう」「受け取った側はどんなカードを受け取ったらうれしいでしょう」などと、「誰に」「どんな気持ちを」という発想に関わる問いかけを次々としています。また受け取る側の気持ちを考えることへも言及しています。これらの問いかけは、授業のねらいが(2)にあることを明確にし、生徒たちに意識づけるために意図されたものなのです。

この後、小山先生は「今日は試作します」と言い、飛び出す仕組みの基本形を提示しました。ここまでの

指導過程を整理すると、次のようになります。

- ①「目的や機能を考えて発想や構想の能力」を育てる手立てとして
 - ・贈る相手を明確にし、その人にどんな気持ちを伝えるかを意識づける。
- ②「創造的な技能」を育てる手立てとして
 - ・飛び出す仕組みの作例を提示し、試したり考えたりさせる。

基本形を試したり、試作したりして飛び出すイメージを思いつくるのはよいのですが、例えば「カエルが口をパクパクしているみたいでかわいい」と思って「飛び出すカエル」をつくろうと発想し、形や色を工夫して仕上げたとすれば、これは授業のねらいに沿った活動にはなっていません。この生徒は発想や構想の能力ではあっても、(2)ではなく(1)のほうの能力を発揮して表現したことになるからです。

生徒たちが授業のねらいを十分に理解し、「誰に」「どんな気持ちを」ということを意識しているかどうかを、机間指導で個別に確認することが大切になります。

小山先生は、ボールが飛び出してくるイメージを形にしようとして取り組んでいるが、「誰に」「どんな気持ちを」が明確でない生徒に対して、「ボールが飛び出してくる、このボールを誰にあげたい?」「誰に贈るかでつくるものが変わってこない?」などと言葉がけを行っていました。

デザインの授業では、デザインを単にものをつくることと捉えるのではなく、人ともとの関係を考え、人と人をつなぐものと捉える視点が大切です。

特集



気持ちを伝える
デザイン